

兜太の

現代俳句塾

作る・味わう・あそぶ

金子兜太



主婦の友社

兜太の

現代俳句塾

作る・味わう・あそぶ

金子兜太

兜太の現代俳句塾

昭和六十三年三月十七日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 金子兜太

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九

郵便番号一〇一 振替・東京二一八七五二七番

電話（編集）03二九四一一二二
（販売）03二九四一一三三

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所 凸版印刷株式会社

私と俳句——序にかえて——

私が俳句を作り始めたのは旧制高校二年のときで、一年先輩の出沢珊太郎（本名三太）に勧められて、初めて俳句会というものに出席しました。そこで出した句、「白梅や老子無心の旅に住む」が、なかなか評判がよかったのです。老子を深く知っていたわけではないのですが、なんとなく親しみを感じていたので、句を出せといわれて作ったらこういう句になってしまったのです。白梅はすでに散って桜の咲くころでしたから、二年生の新学期が始まっていたときだったと思います。

それまでは俳句を作る気がまったくなかった、といってよいでしょう。というのも、小学、中学時代を通じて、私にはこんな体験があったからです。

私の父親は、山国秩父（埼玉県）の皆野町で医院を開業していました。そして俳句が好きだった。昭和ひと桁のところだから、テレビはないし、ラジオも単調、祭や盆踊りくらいしか楽しみのない時代でした。そこで、俳句作りを楽しもうと、父親のところに集まってくる人もいたのです。青年が多かった。あとは中年から初老の男性で、女性は一人もいませんでした。女性が、父親の催す句会に顔を見せるようになるのは、第二次大戦のあとになります。

青年たちはみな知的でしたが、それ以上に野性的な人が多かったのです。自転車をころがして峠

を越えてやって来ました。会のあと、夜中の峠を越えて帰ってゆきます。元気がよいのです。句会の間は神妙にしていますが、終わると必ず酒が出て、酔いが回り始めると大声でわめき合い、どなり合い、あぐくの果ては殴り合いをしたものでした。要するに「なんでおめえは俺の句をとらなかつたのだ」「俺のこんないい句がわからねえのか」「おめえはこの前、俺の悪口をいつて歩いてたつちゅうが、太え野郎だ」——といったぐあいに、俳句に関係のないことまでいい出して、わめき合いをするのです。

句会は互選で進められていました。つまり、一人二、三句を無署名で出して、全員が出し終わるとそれを幹事が紙に五句ぐらいずつの割で書き写して、回覧するのです。そのなかから良いと思う句を書き抜いておいて、一人五句選と決まれば五句を選び出して、こんどは署名して幹事に渡します。全員の選が終了すると、披露係がいて、一人一人の選句を読みあげるのが、大声で、気持ちよく読まないで、すぐ「披露交替」などといわれるから、音吐朗朗とやります。その声が部屋いっぱいに響くころになりますと、私も母親も、看護婦さんも、近所の物好きまでがやってきて、句会を覗くのでした。

読みあげられた句の作者は、そのつど、自分の名前を大声で名のります。これがなんともいえぬいい気持ちなのです。大勢から選ばれたときなどは、幾回でも名のあることになりましたから得意絶頂で、終わりのあたりでは氣どった声を出したり、わざと引っぱってゆっくりやったりしました。

「この野郎」などと悔しげにわめく者は、今夜の成績の悪い人なのです。「誰もとりやがらねえ。句がわからねえんだ」などと、ぼやくことばやくこと。最後が父の選句発表で終わるのですが、父は句数にこだわらずに、とれるだけとていました。そして講評。終わると酒、という次第で、酔いが回ってくれば、不平不満のひと言ぐらいいつてみたくなる者がいるのはあたりまえなのです。

だいたい十五、六人から三十人くらいは句会に集まっていましたから、どなり合い、殴り合いともなれば、席はまことに賑やかでした。父はその雰囲気が好きだったようで、ニコニコしながら眺めていて、すこし荒っぽくなると、制していたわけです。「やめろ」といつてもきかないときは、そこまでノコノコと出ていって、双方の胸ぐらを掴まえて引き分けていました。

母親はそうした騒がしい状態を見ながら、しばしば私にいったものです。「兜太、俳句なんかやるんじゃないよ。あれは喧嘩だからね」——私も子供ごろにそう思い込んでしまったので、金輪際俳句はやるまいと思っていました。いや、やってはいけないものと思いついていたのです。

それなのに、一年先輩の出沢珊太郎に誘われたとき、私は一も二もなく承知して、いっしょに句会に出席してしまつたのです。そのときの句会には、高校の教授を中心に学生十名くらいが集まっていたのですが、それ以後はそうふえはしなかったと思います。しかし私は熱心なメンバーの一人になってしまつて、教科書を読んでも、すぐ俳句ができたので、それを欄外に書き留めておいたりました。すこしむずかしい本を読んでいるときもそうでした。

俳句はやるまいときめていたのに、なぜこんなにも簡単にのめり込んでしまったのか。理由は簡単で、一つは出沢の魅力だったのです。第一、名前が三太・兜太（これは私の本名）です。「三ちゃん・とおちゃん」と呼ばれていたから、兄弟のような気持ちでした。それに加えて、三ちゃんはすばらしい才能の持ち主だったのです。このことを書き出すときりがないのでやめますが、俳句、短歌、自由詩、小説、行くとして可ならざるはなし。英語の力拔群。バスケットボールの選手としてもたいしたもの。酒が強く、旧制高校生の特徴ともいえる弊衣破帽ぶりが板についていました。そして、いつもニコニコ、ニヤニヤしていたのです。

さらに、俳句にのめり込んでいった理由は、最初に出した句がほめられたことにあります。それと、これも出沢先輩に勧められて参加した、全国学生俳句雑誌『成層圏』で、客員としてときどき句や文章を発表していた、加藤楸邨、中村草田男、竹下しづの女の作品にひきつけられたことなどがあげられます。そのとき読んで、いまでも忘れられない句があります。

冬空西透きそれを煙ののぼるかな 草田男

その冬木誰も瞋めては去りぬ 楸邨

女人高邁芝青きゆゑ蟹は紅く しづの女

私はこうした作品を読んで、俳句のような短い形式でも、いろいろなことがいえる、と思ったものでした。五・七・五字の形式（それが基本で、すこし字数がふえても減っても差し支えありません）を巧みに使うと、ただ一行二行と文章を書いてゆく（これを散文といいます）よりも、はるかに短いのに、同じことが違う味わいでいえる、と直感したといってもよいでしょう。それまではどこかで、俳句のような短いものでは、たいしたことはない、とバカにしていたようです。だから、故郷の人のようにそれでわめき合いをするなんて、愚の骨頂とも思っていたのです。

五・七・五字が「定型」であり、散文ではなく韻文であって、韻文には韻律が伴うから、書き慣れれば、かなり複雑なことまで書ききれる、とはつきりわかるようになるまでには、それ以後相当な時間が必要でした。しかし、ともかくも三人の先輩俳人の句は、なんとなくそのことを感じさせてくれたのです。俳句はいいな、俳句でやれるな、と思っていました。

そうこうしているうちに、改造社が出している俳句総合誌の『俳句研究』で、中村草田男が選をするのを知ったのです。さっそく出してみたところ特選に選ばれてしまったのだからうれしかった。そのなかの一つに、

さるすべり
百日紅下宿に慣れぬ身を横たえ

というのがありました。夏休みが終わって下宿に帰ると、窓ぎわの百日紅が紅い花を咲かせていて、私は畳にごろりと寝転がって俳句ばかり作っていたのでした。倦怠（アンニユイ）というか、そんな物憂い気分を書くことができていて、それを親愛する先輩に特選に選んでもらったことが、たまらなくうれしかったのです。

私は思いつくままに俳句を書き留めてゆきました。そして、作れば作るほど、故郷の人たちの句会の雰囲気、こんどは実に懐かしいものに思えてきたのです。「人間くさい雰囲気懐かしさ」といいましょうか。やがて、私は、「俳句は人間を書くもの」と思い込むようになってゆきます。花や鳥だけをうたうものではなく、なによりも人間くさくなければ詰まらない、と思うようになってゆくのです。

大学に入ってから俳句を作り続けました。いま思い出してもそれがよかったと思えることは、とにかく書きたいままに書いたということで、他人の批評や俳論など、ほとんど気にしませんでした。五・七・五字を相手に自由に書いていたのです。そして秩父に帰ることも多かった。秋の初め、曼珠沙華（彼岸花）の赤い花が山畑の路のあちこちに咲いて、子供たちが走り回っていました。すぐ句ができたのです。

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子

目次

・ 兜太の現代俳句塾 ・

第一章 俳句の基本……………13

俳句とはなにか・14

俳句は「最短定型詩」なり／「自然の触れ合い」を求めて

俳句の成り立ち・22

連句から発句へ／俳諧というもの

季語にこだわらない・27

「生活実感」をあらわす

韻文・34

韻文の持つ純粋性と大衆性／俳句は「うたわなない」韻文／
形に託したところの表れ方／散文から俳句へ

リズムと切れ字・39

断定の余韻／自由律

短さの魅力・⁴⁶

即興の味わい／即興と挨拶／即物の効果／特殊な書き方／
待つ間の記録

絵画性と心・⁵⁵

画中に詩あり／感動を形におさめる／形とところ／形で書
く／俳句の「像」／像で伝える／像と想念のとけ合い

第二章

俳句を実際に作る……………⁶⁷

へつかむ・⁶⁸

写生／発見／主観を少し加える／実景と情景／景色を動か
す／景が変わる／まるごととらえる（つかむ）／景色がふ
くらむ／主観が前に出てくる／「こころ」を映す／率直に
切りとる／「人」にゆきつく

へしやぶるゝ・
91

実感と言葉／「生活実感」をとらえる／三位一体／「喻え」というもの／「喻え」の使い方／「喻え」の働き／「もじり」の手法／「もじり」の要領／「もじり」と「なぞり」／戯事ざれごとに真実あり／新しいものを加える／新しきは俳諧の花／一茶のもじり／季語ともじり／川柳ともじり／狂句／短詩形ともじり／「自然」「ありのまま」／俳句の表記法／漢字の働き／擬態語と擬声語／流行語と俳句／表記法Ⅰ／表記法Ⅱ／表記法Ⅲ

へ響かすゝ・
133

二物衝撃／響き／変形

批評と添削・
139

第二章

俳句を鑑賞する……………

155

「サラダ記念日」と現代俳句・192

社会現象になった俵万智短歌／俳句の「サラダ記念日」は可能か／「まじめさ」が俵万智短歌の人気の秘密／「実」の世界に立つて「虚」を描く／蛙は古池にはとびこまない

第四章

兜太歳時記……………

一月	着ぶくれ・	212	／	二月	紅梅・	214
三月	彼岸・	217	／	四月	林檎の花・	220
五月	端午・	223	／	六月	時鳥・	226
七月	牛蛙・	229	／	八月	西瓜・	232
九月	木槿・	235	／	十月	十三夜・	238

あとがき

初出一覧・
267

十一月

行秋・
268

／十二月

おでん・
266

装丁・松本八郎(ED)

表紙イラスト・松本 桂

本文イラスト・高林みつ子

第一章 俳句の基本

俳句とはなにか

俳句とはなんなのだ、と自分に問いかけてみる必要があります。短くて、古くさい五七調で、たいたことはないうなものだが、作ってみると、まんざらでもないし、友だちもできる。俳句はもののいえない文学である、などと、もっともらしくいう人もいるが、どうしてどうして、けっかうものがいえるのにあきれるときだってある。季節感が味わえる。いやそればかりではなく、季節とはかわりのないような日常だって味わうこともできる。この短い五七調は、いったい、なんなのだ。

その疑問に十分に答えるほどに、私の俳句体験はまだまだ熟していませんし、勉強も足りません。なにしろ、俳句を含む「日本のうた」ということになれば、その始まりの『古事記』『日本書紀』に記載されている、いわゆる「記紀歌謡」だけでも約百九十首（重複分を除く）はあり、それを含めた上代歌謡は約三百首といわれています。それに続く『万葉集』となると約四千五百首。この歌集ができたのが八世紀のころ、奈良時代ですから、それ以来現在まで、千二百年がたつてい